新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2023年（令和5年）
10月31日
第1143号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551〈代表〉
（03）3468－5588〈編集〉
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

新宗連

第32期 第5回 理事会を開催

令和6年度 事業大綱案を承認

11月30日に関東大震災100年慰霊式典

オンライン併用で開催された理事会

新日本宗教団体連合会（新宗連、石倉寿一理事長）は10月11日午後1時半から、東京・代々木の新宗連会館とオンライン併用による「第32期第5回理事会」を開催した。令和6年度事業大綱案などを承認、また今年が関東大震災100年にあたることから東京大空襲78年と併せ、11月30日に東京都墨田区の東京都慰霊堂（『栞』参照）で犠牲者慰霊式典を開催することを承認した。

理事会は開会にあたり、深田充啓名誉会長があいさつを述べた後、石倉寿一理事長を議長に議事に入った。審議事項では、企画委員長の田澤清喜理事が令和6年度事業大綱案を説明。審議の後、原案通り承認された。

事業大綱の「活動方針」では、新宗連が教えや信条の違いを越え、共に手を携えて、人類福祉の増進と世界平和を目指して祈りと行動を続けてきたこと、また戦争や紛争、近年多発する自然災害、感染症等、人々の不安が絶えない社会の中で、「一人ひとりに寄り添い、光明を示していく宗教の役割が希求されている」と記した。

そして新宗連の4つのスローガン（信教の自由を守ろう・信仰心を広めよう・宗教協力を進めよう・世界の平和に貢献しよう）の実現を目指して『定款』に掲げる「目的」「事業」を推進することとした。

事業大綱では、活動方針と4つのスローガンに基づき、具体的な5項目の「重点課題」を掲げた。

また、石倉理事長から、「関東大震災100年・東京大空襲78年犠牲者慰霊式典開催概要」（案）について提案があった。今年、関東大震災から100年にあたることから、東京大空襲78年と併せて、あらためて犠牲者に慰霊と鎮魂の誠を捧げると共に東京大空襲の犠牲者を追悼・慰霊し、今を生きる人々が大震災、大空襲による記憶と教訓を学び、風化を防ぎ、防災と非戦の誓いを新たにする―との趣旨。

11月30日午後1時から、東京都墨田区の東京都慰霊堂での式典、慰霊堂のある横網町公園内の復興記念館の見学などを実施するもの。審議を経て、原案通り承認した。

このほか審議事項では、新宗連の行事や会議の際に読み上げる、絶対非戦・世界平和並びに新型コロナウイルスの犠牲者哀悼と終息祈念の文言を盛り込んだ「祈りのことば」（令和3年1月改訂）について、いまだ新型コロナウイルス感染症が終息に至っていないため、これを継続していくことを承認。さらに令和6年度の主な会議・行事予定、規程・内規等の整備についても原案通り承認した。

報告事項では新宗連本部並びに委員会・機関、新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）、総支部・協議会等の活動状況の報告が各担当者から行われた。

「宗教2世」「信仰心を広めよう」考える学習会

理事会の議事終了後には、「宗教2世」問題と新宗連スローガン「信仰心を広めよう」について考える学習会が開催された。

はじめに企画委員会の田澤清喜委員長が、学習会に至る経緯を説明。講師の上越教育大学の塚田穂高准教授が、「『宗教2世』問題を／から考える――信仰継承・宗教的多元化・宗教リテラシー」のテーマのもと講演した。

塚田氏は「宗教2世」問題の他、グローバル化と宗教的多元化の状況に触れ、「今後、文化・宗教的背景の多様化と、宗教文化教育の実践によって、外国人に限らない特定の信仰を持つ人々との理解・共生も進む」、「新宗連が信仰的マイノリティと連帯することは『信仰心を広めよう』の新たな展開にもなるのではないか」などと述べた。

声明文「G7広島サミットを振り返って」を外務省に手交

10月12日 WCRP日本委員会

声明文の手交―写真左から牛尾理事、戸松理事長、高村政務官、國富理事、安研究員、矢萩特別会員（写真提供／WCRP日本委員会）

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（戸松義晴理事長）は10月12日午後4時半、戸松義晴理事長ら代表者5人が東京都千代田区の外務省を訪れ、高村正大外務大臣政務官と会談し、声明文「G7広島サミットを振り返って」を手渡した。

WCRP日本委員会は今年5月にG7広島サミットが行われることを受けて、同月10日に広島市で「宗教者による祈りとシンポジウム」を開催し、「G7サミットに向けた宗教者提言～『ヒロシマの心』が導く持続可能な平和をめざして」と題する提言書を採択。提言書は、同サミット参加国の指導者に「ヒロシマの心」の具現を求めており、同月15日には岸田文雄首相にも手渡された。

その後、同サミットが終了し、「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が発表されたことを受け、WCRP日本委員会は宗教者の視点からサミットに対する成果や課題をまとめた声明文を9月13日に発表。声明文では「G7サミットが広島で開催され、7カ国首脳が原爆慰霊碑で祈りを捧げ、原爆資料館を見学し、被爆者の方々と対話を実現したことは、歴史的に意義深いことであった」と評価した一方、発表されたG7首脳広島ビジョンで「核兵器廃絶への意志が全く見られず、むしろ核抑止論を正当化し、核兵器保有の維持を被爆地で認めてしまった」ことなどに対し、遺憾の意を表した。

12日の会談では冒頭、戸松理事長から高村外務大臣政務官へ声明文を手渡した。高村外務大臣政務官は感謝の意を示し、「声明文をしっかりと受け止めたい」と述べた。

また、会談ではロシアによるウクライナ侵攻についても話題にあがった。昨年9月にWCRP日本委員会と同国際委員会が東京で開催した「『戦争を超え、和解へ』諸宗教平和円卓会議」第1回東京平和円卓会議について、海外の出席者の日本入国などで外務省から便宜を図っていただいたと戸松理事長らが謝意を表した。

そして「『戦争を超え、和解へ』諸宗教平和円卓会議」第2回東京平和円卓会議の開催が来年2月に決定したことを伝え、外務省に対して再度の協力要請を行った。

外務省を訪問したWCRP日本委員会の代表は以下。戸松義晴理事長、國富敬二理事、牛尾淳理事、矢萩新一特別会員、安勝熙・平和研究所研究員。

パレスチナ・イスラエル情勢―

憂慮し平和を願う声明と祈り

10月7日、パレスチナ自治区のガザ地区のイスラム組織・ハマスが、イスラエルへの攻撃を開始して以降、ガザ地区とイスラエルの双方で死者8400人（10月30日時点）を超える戦闘が続いていることに、国内外の宗教界から深い憂慮と平和を願う声明の発表や、祈りの呼び掛けが相次いでいる。

新宗連は10月27日、石倉寿一理事長名で「パレスチナとイスラエルを巡る情勢に関するメッセージ」を発表。犠牲者に哀悼の誠を表し、1日も早い事態終息を祈念。そして「私たちは、宗教者として、争いの根底にある人々の心の奥底にも目を向けて、対立や不信の関係にある人々が怨みの連鎖を断ち切り、対話や協調によって平和的に解決されること、そして、今なお苦難の状況にある人々に一日も早く安寧の日々が訪れるよう祈り続けてまいります」と述べた。

世界宗教者国際会議（Religion for Peace/WCRP）国際委員会は10月10日に「イスラエル―ハマスの紛争に対するReligion for Peace声明」を発表。今回の悲劇的な出来事に対して、「私たちの沈痛な思いと祈りを、被害に遭われたすべての方々、特に、愛する人を亡くされた方々や今も捕らわれている方々に捧げます」と述べ、エルサレムがイスラエル人とパレスチナ人にとっての故郷であり、ユダヤ教・キリスト教・イスラームの3宗教にとって聖地であることを示し、平和のために政治的勇気と誠実な諸宗教協力の両方が不可欠であると見解を表明。

そして暴力の完全な停止と、民間人の人質の開放に向け即時行動を求め、ガザ地区に食料を運ぶ人道的回廊の創設を求める国連世界食糧計画と協調することを述べた。

立正佼成会（庭野日鑛会長）は10月21日、「イスラエル・ハマスの紛争に関するメッセージ」を発表。中学生が保護者と一緒に紛争や迫害などで傷ついた世界の子どもたちの幸せを願い、布製の袋に文房具やおもちゃなどを詰めて送る「ゆめポッケ」を30年にわたり活動し、ガザ地区の子どもたちとも交流し、イスラエルとパレスチナをはじめとする青年たちの対話に取り組んできたことを説明。「あの青年や子どもたちが今、紛争下で命の危険にさらされていることを思うと、悲しみで胸が張り裂けるようです。一日も早く暴力の連鎖が止むこと、そして人々の心と暮らしに平穏が訪れることを、心から願っています」と述べ、対話・協力を通じて平和を築くことを表明している。

新宗連加盟教団の妙智會教団と善隣教、玉光神社などが教団行事の中で、今回の情勢を憂い、平和を願う教団代表の思いが示された（2・3面参照）。

酒々抄

いのち輝く世の中でありたい

四季の節目、生け花から学ぶ多様な教え

秋風揺らぎ心踊る季節、今年は異常気象で世界中が天変地変に見舞われました。これも神仏のおしらせなのでしょうか。日本の四季はなくなるのか。二季になるのかな。という声さえ聞こえてきます。

日本の四季と言えば、昔から人は、風土や季節の移ろいを五感で感じ、節目の時に神事や行事を行い、心と身体を整えてきました。その中で豊かな時間を持ち、折々の季節に咲く花を飾り、人をもてなしてきました。

季節の移り変わりを感じ取ることが難しい時ですが、昔からの日本の習わしも、大切に受け継ぎたいものです。

四季折々の節目に花を飾ると言えば、私が通う生け花教室で、男女の小学生が楽しそうに、お花を生けていました。世の中は少子化というのに、いつもより沢山の子どもが、来ていました。

生け花は、目の前にある花や木の個性を見極め、その花がいかに美しく生き生きと輝きを出せるか、美の法則を伝書から選び出し、作品にしてゆきます。

子どもは、お手本を見ながら、それなりの形になってゆくことを楽しんでいきます。

また、花の生け方は、一輪一輪の花の顔をしっかり見定めます。花は太陽に向かって伸びますので、花の顔を上に向けると美しくいけることができ、活力がでます。

生け花の魅力は、それぞれの花の個性を引き出し、見る人々の心を和ませ、ぬくもりにも感謝し、その花の命の移ろいも感じ命の大切さも学びます。

時代と共に風習は移り、趣向は変化しますが、教えの中に「神仏によらず一人の心によりて　賢き智恵の悟りようにある」と教えられています。

日本の伝統も、時代に合わせて楽しみたいものです。

多様化する今、一人ひとりの良さを見つけ、相手がこの世で生を受けた限り、その人の個性をよりよく伸ばし輝ける社会でありたいと思います。

相手を生かし生かされあえるいのち輝く世の中でありたいと花を生けながら思っております。

（深田惠子・円応教惠主）

旧統一協会に対する解散命令請求

日宗連が声明を発表

10月13日

10月13日、文部科学省から東京地裁に世界平和統一家庭連合（旧統一協会＝弊紙、略称表記）に対する解散命令請求が申し立てられたことを受けて、日本宗教連盟（日宗連、田中恆清理事長）は同日、同連盟名で声明を発表した。

声明では今後、司法の場での解散命令の可否を巡る審理を注意深く見守っていくとして、昨年9月1日に理事長談話を発表していることにふれ、「今回の問題を通してより一層、適正な宗教法人運営と、宗教の本質的な役割の重要性を再確認し、仮にも不適正な事案を発生させることがないよう、加盟団体に適宜周知をはかって参る」と述べた。

《今号の紙面から》
＜2面＞ 新宗連青年会中部連盟「ピースフォーラム2023」、同九州連盟「ユースフォーラム2023 in 佐賀」
＜3面＞ 加盟教団「秋の大祭」各地で執り行う
＜4面＞ 日本宗教学会「第82回学術大会」、「第20回奈良県宗教者フォーラム」
（次号発行は12月下旬の予定です）

栞（しおり）

東京都慰霊堂　東京都慰霊堂は1923（大正12）年9月1日に発生した、関東大震災による遭難死者（約58,000人）の遺骨を納めるための慰霊堂として、当時の東京市内で最も被害の大きかった陸軍被服廠跡に、震災7年後の1930（昭和5）年に震災遭難者の霊を供養し、東京を復興させた大事業を記念するため、建立された。その後、1945（昭和20）年3月の東京大空襲などによる殉難者の遺骨も合わせて、現在は約163,000体の遺骨が安置されている。毎年9月1日をはじめ、慰霊・追悼の行事が催される。慰霊堂が建つ横網町公園内には震災及び戦災の遺品や記録を展示する復興記念館や追悼碑などがある。

緊急出版　カトリック大阪教区神父　西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税　四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

ハーベスト社
東日本大震災後の宗教とコミュニティ
星野英紀・弓山達也編　本体価格7200円＋税
東日本大震災後の福島県いわき市と相双地域のコミュニティの再建における宗教の役割（避難場所としての宗教施設、宗教教団や宗教者の動向など）を解明する。
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著　本体価格3000円＋税

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職　三上章道
四六判　定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「縁社会」となったプロセスを追い、そのこころの喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855　FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp　価格税込

校成出版社
最新刊
初期仏典研究に裏打ちされた「釈尊伝」入門書！
森政弘・編著
◎四六判／576頁 ◎定価2970円（税込）
釈尊のご生涯をたずねて
「仏さま」の実像とその教え
ロボット工学の第一人者・森政弘氏が『華厳経』の善財童子の旅に倣い、仏教学者たちを訪ね歩いて取材を重ね、釈尊の実像を解明する。
好評既刊
般若　仏教の智慧の核心
森政弘・著 ◎定価1760円（税込）
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
https://books.kosei-shuppan.co.jp/

◉緑風出版◉
◉あなたは住民税非課税世帯になっていませんか？
住民税非課税制度活用術
太田哲二　1650円
◉住民税非課税世帯になれば住民税ゼロだけではなく、介護保険、医療費、保育、高等教育修学支援などの優遇措置がある。高齢者世帯・ひとり親世帯などは住民税非課税限度額以下になる可能性が高く、そうなればこうした優遇措置を受けられるのです。どうすれば活用できるかを伝授。
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
御木徳近著　パーフェクトリバティー教団第二代教祖が、宗教家としての悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
老春（ろうしゅん）謳歌（おうか）
長生きの秘訣
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153　FAX03-3465-6867
【現在Amazonへは出荷停止中です】
〒113-0033 文京区本郷2-17-5/税込
☎03(3812)9420 www.ryokufu.com/

芸術生活社
【芸生文庫】

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック
〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治　編　A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価 各巻3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
Tel 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

青中連 ピースフォーラム2023

タイ仏教の瞑想を体験

新宗連青年会

新日本宗教青年会中部連盟（青中連）は9月23日午後1時半から、名古屋市の立正佼成会名古屋教会を主会場に、オンラインとの併用により「ピースフォーラム2023」を開催した。

今年のテーマは「発見！人を想う〝あたたかい自分〟～平和の燈火」。タイ在住で、タイ仏教に関する通訳・翻訳、執筆を行う浦崎雅代氏を講師に迎え、タイからオンラインで基調講演、「気づきの瞑想」の簡単な体験を行った。

青中連委員のあいさつの後、浦崎氏が紹介され、講演。浦崎氏は立正佼成会沖縄教会の出身で、大学在学中に教会の研修や新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）のネパールワークキャンプに参加した経験などから、第三世界の開発・発展の問題に関心を持ち、東北タイの開発僧について研究を行った。

浦崎氏はその後、タイ国立マヒドン大学で大乗仏教や日本の新宗教について教えた経験があり、その時のエピソードに触れながら、タイの仏教（上座部仏教）と日本の宗教の特徴などについて、分かりやすく解説した。

休憩後、浦崎氏の指導でタイ仏教式の瞑想の一部を参加者は体験した。椅子に座った状態で手と腕を一定の所作で動かしたり（手動瞑想）、ゆっくりと自由に歩き回りながら（歩行瞑想）、自分の心の動きや思考に気づき、意識をいま・ここに向けていく瞑想を実践した。参加者からは「すごく穏やかな気持ちになった」「眠くなったり、余計なことを考え出したり、思ったよりも難しかった」といった感想が聞かれた。

浦崎氏は「就寝前など、ぜひ日常生活に瞑想を取り入れてみてほしい。心をコントロールし、いま・ここに意識を集中できると、目の前の仕事やさまざまなパフォーマンスを向上させることができる」と述べた。

浦崎氏の指導のもと、歩行瞑想を実践する参加者

青九連 ユースフォーラム2023in佐賀

佐賀の魅力に触れ交流

新日本宗教青年会九州連盟（青九連、柴田雅透委員長）は10月8日午前10時から、佐賀市の立正佼成会佐賀教会で「青九連ユースフォーラム2023in佐賀」を開催した。青九連では例年、輪番で包括地域の各青年委員会が受け入れを行い、その地域に集い、ユースフォーラムを催している。今年のテーマは「佐賀の魅力をSAGAしに行こう」とし、参加者約80人が佐賀教会周辺を班ごとに分かれ、ウオークラリーを行った。

開会式のはじめに、佐賀教会の青年による一乗太鼓が披露され歓迎。その後、新宗連青年会の宮本泰克委員長、立正佼成会唐津教会の花井康次教会長があいさつを述べた。

開会式の後、各班に分かれ、オリエンテーションを行い、自己紹介や教会周辺の佐賀城本丸歴史館や佐賀バルーンミュージアム、佐賀県立美術館など、目的地を決める中で打ち解けた雰囲気となった。

この後、各班が見学場所に向けて出発。参加者の一人は「今回、佐賀県に来るまでは、佐賀の事はあまり知らなかったが、ウオークラリーを行う中で佐賀の歴史や食文化などの魅力に触れることができ、イメージが変わった」、「教えの違う者同士が、楽しく交流できて良かった」と感想を述べた。また、「佐賀県で11月に開催される数多の気球が空を覆うバルーンフェスティバルにも訪れてみたい」との声も多く聞かれた。

ウオークラリー終了後、佐賀教会に戻り、各班が訪れた場所でのベストショットの発表が行われ、趣向を凝らした写真に会場は参加者の笑顔に包まれた。

この後、閉会式に移り、受け入れ教会の在津賀通教会長が総括のあいさつ、柴田委員長が主催者あいさつを行った。

各班が趣向を凝らしたベストショットを発表

新宗連 総支部協議会

この後、次回開催地である北九州地区への引き継ぎ式が行われ、ミニチュアの気球が北九州地区の担当者に渡された。

最後に青九連佐賀県委員会の委員長がお礼の言葉を述べ、閉会した。

佐藤貫首が法話（高尾山）

高尾山薬王院、思親会、大山阿夫利神社を訪問

首都圏総支部

首都圏総支部（本山一博会長）は9月11日に研修会を開催し東京都八王子市の高尾山薬王院を参拝した。

午前9時半に高尾山口駅に首都圏総支部と各都県協議会役職者ら約60人が集合。ケーブルカーに乗車して高尾山中腹へ移動、そこから薬王院までの参道を登山した。

御本堂で「御護摩祈祷」に参列、御本尊の飯縄大権現を参拝した後、佐藤秀仁第三十三世貫首の法話を聴講した。

佐藤貫首はインバウンド等の影響で年間350万人以上が高尾山を訪れ、ハイシーズンは登山者であふれる現状に触れながらも「朝夕の勤行時は最も霊山の姿を感じることができる」「山川草木皆是仏法―お山の大自然の姿そのものが神仏の御姿」と述べ、修験道の霊山、修行場としての役割をはじめ、富士講との関係等について解説し、高尾山は本来山伏が修行する霊験あらたかな聖なる山であることを述べた。

一行は精進料理を食した後、書院や仏舎利塔等を参拝、見学して下山した。

10月16日には神奈川県協議会（尾上正行議長）の受け入れにより令和5年度総会を開催した。

午前10時、伊勢原市の思親会本部等を会場に令和5年度第1回総務会を開催。古川謙一・神奈川県協議会副議長（思親会）の歓迎あいさつと思親会の概説を受けて、本部大孝堂を参拝した後、総務会に移った。

第32期第5回理事会の決定事項等を確認した後、首都圏総支部の令和6年度事業計画について審議した。

午後は思親会からほど近い大山へ移動。一般会員らの参加者も加わり、ケーブルカーに乗車して大山阿夫利神社（下社）を訪問し、正式参拝の後、目黒久仁彦権禰宜が「大山詣り～その歴史と庶民を魅了したもの」をテーマに講話した。

目黒権禰宜は、江戸時代以降、地域で人を集め参拝する「講」が作られ、現在に至る「大山詣り」の原型が整備されてきた歴史を伝え、「元祖日本のツアー旅行」と表現した。

さらに、祈願文を書いた木刀を納める独特な風習や、「あめふりさま」と称され、雨乞いの山として崇敬されてきた由来等を説明。1年に1回開催される「講」の集まりにより、人と人との結び付きや信仰心が醸成され、仲間との絆により地域が守られていった経緯もあることを振り返り、「歴史から学ぶことは多々あります。社会的な繋がりが希薄な現代の問題解決のヒントにもなるのではないか」と述べた。

目黒権禰宜が講話（大山阿夫利神社）

思親会の概説を受ける

新宗連 全国総支部会議―

活動再開に向けて情報交換

新宗連は10月12日午後2時から、新宗連会館とオンライン併用による「第32期第2回全国総支部会議」を開催した。

前日に開催した第32期第5回理事会の報告があり、特に総支部・協議会活動に関係する令和6年度事業大綱や、事業計画策定にあたっての補足事項、さらに予算編成と総支部・協議会の事業計画案、予算申請提出等の変更事項を確認した。

続いて規程・内規の整備について、主に将来構想検討プロジェクトで協議した、総支部・協議会代表者の旅費交通費に関する内規について事務局より説明がなされた。質疑応答の後、総支部・協議会から上半期の活動報告や今後の予定などの近況報告のほか、活動再開にあたっての展望や課題について、情報交換を行った。

不当寄附勧誘防止法と法人運営

日宗連・文化庁　福島市で説明会

日本宗教連盟（日宗連）と文化庁主催による「法人等による寄附の不当な勧誘の防止等に関する法律について」及び「宗教法人の管理運営に関して」の説明会が9月27日午後1時から、福島市内の会場で開催された。

説明会は宍野史生・日宗連理事の開会あいさつに続き、「不当寄附勧誘防止法」について、消費者庁の久保浩参事官と同庁寄附勧誘対策室の髙橋雅也課長補佐が説明。「宗教法人の管理運営」については文化庁宗務課の中島充伸課長補佐と大澤広嗣・専門職が説明した。質疑応答では不当寄附勧誘防止法の内容や不活動法人の対応などについて、具体例を挙げての応答がなされた。

第2回東京平和円卓会議、来年2月に開催

WCRP日本委　理事会

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会（戸松義晴理事長）は9月13日午後2時から、神戸市の神戸ムスリムモスクを主会場にオンライン併用で「第45回理事会」を開催した。

審議事項の中では、昨年9月に開催した「戦争を超え、和解へ」をテーマとした第1回東京平和円卓会議で採択された声明文に基づき、第2回東京平和円卓会議を来年2月18～22日、都内ホテルで開催することを承認。第1回会議で出席できなかった中南米の宗教者が参加する予定。

WCRP日本委員会は今年5月のG7広島サミット前に提言書「G7サミットに向けた宗教者提言～『ヒロシマの心』が導く持続可能な平和をめざして」を岸田文雄首相に手渡したが、サミット終了後、成果と課題について再度、「G7広島サミットを振り返って」（案）を了承、日本政府に提出することとなった。

さらに来年7月、「AI倫理のための国際会合」を広島市内で開催することを了承した。同会合は2020年2月、ローマで署名された人工知能への倫理的アプローチを促進するための文書「AI倫理のためのローマの呼びかけ」を受け、ローマ教皇庁立生命アカデミーからWCRP日本委員会に会合開催の要請があり、検討を進めていたもの。

【諸会議・報告】

理事会学習会、令和6年度事業大綱案について検討　企画委

新宗連企画委員会（企画委、田澤清喜委員長）は8月30日午前10時から、東京・代々木の新宗連会館とオンライン併用で第32期第7回委員会を開催した。

10月11日の第32期第5回理事会後の学習会の概要を確認し、詳細は講師の塚田穂高・上越教育大学准教授と調整することを申し合わせた。

続いて、その後の第35回教団人セミナーをどのように設定するかを協議。教団人セミナーの詳細については継続審議とし、来年1、2月頃に調整することを申し合わせた。

続いて、第32期第5回理事会に上程する新宗連令和6年度事業大綱案については協議。活動方針においては4つのスローガンを前面に出すこと、重点課題で「一人ひとりの主体的かつ自由な信仰」の促進を加えることなどを申し合わせた。

意見書提出等を振り返る特別委員会は活動終了へ　信教委

新宗連信教の自由委員会（信教委、鈴木裕治委員長）は8月31日午前10時から、東京・代々木の新宗連会館において第32期第8回委員会並びに、第5回「信教の自由」特別委員会を、オンライン併用で開催した。

報告事項では、岸田文雄首相ら閣僚が8月15日に靖国神社へ玉串料を私費で納め、一部の国会議員が靖国神社に団体参拝した記事などを紹介した。

また、8月1日付で石倉寿一理事長名のメッセージ（声明文）を新宗連ホームページで発信した情報を共有。併せて「靖国神社の政治利用に対する意見書」を提出したことについて振り返り、所感や課題等の意見交換を行った。

協議事項では、特別委員会の今後の活動について、理事会への活動報告をもって終了とすることとし、報告内容について協議した。

令和6年度の予算編成方針について協議　会計委

新宗連会計委員会（中村史郎委員長）は10月19日午後1時半から、新宗連会館とオンラインの併用により第32期第4回会計委員会を開催した。

「令和6年度事業大綱案」について説明があり、予算編成方針について協議した。

イスラエル パレスチナ

戦闘の早期終結を祈願

開教記念日・平和祈願式　妙智會教団

妙智會教団（宮本惠司法嗣）は開教記念日にあたる10月12日午前10時から、東京・代々木の本部本殿で「開教記念日・平和祈願式」を執り行った。

例年は「ありがとうインターナショナル」設立と宮本惠司法嗣の指導により式典名を変更した。

式典は玄題三唱、「献灯献華献供の儀」の後、導師の宮本法嗣が入殿し、「御祈願」を奏上。開教73周年とありがとうインターナショナル設立33周年を迎えたことを述べた上で、10月7日のパレスチナ自治区のハマスによるイスラエルへの奇襲攻撃以来、双方で甚大な死傷者が出ていることを憂いた。

そして宮本丈靖大導師による世界平和のための祈りと行動の指導を説き、イスラエルとパレスチナの戦闘の早期終結を祈願。また、来年11月に中東でありがとうインターナショナルの第6回フォーラムの開催準備が進められていることに触れ、宮本ミツ会主の世のため人のための土台となるとの「み教え」を多くの人々に伝える慈悲行の導き、正しい先祖供養、流産児供養の実践を固く誓うことを表明。「開教記念日にあたり、信者一人ひとりは各自の使命を自覚し、精進、努力することをお誓い申し上げます」と奏上した。

電報披露と参列者一同による「綱領」唱和の後、宮本法嗣が「ご指導」を行った。「平和祈願式」と式典名を変更した経緯をあらためて述べ、自身が宮本大導師の国連でのスピーチの準備を進めていた2001年、9・11同時多発テロにより宮本大導師のスピーチが中止となり、2002年に実現できた「お手配」の経験を語った。

そして来年のフォーラムに向け、フォーラム準備のため中東に行かず、平和を祈ることを決意したことを披歴。「私たちは遠い国のことは自分事に思えないと思います。会員の皆様にお願いしたいことは今回の争い事に対して、他人事ではなく、心をつくって平和への祈りを捧げてもらいたいと強く、強く思っております」と平和祈願式への思いを会員に熱く語りかけた。

この後、ありがとうインターナショナルの活動報告と会員による体験発表、「教団歌」を参列者一同で斉唱し閉会した。

平和への思いを熱く語る宮本法嗣

協力融和の精神で学び実行を

神里聖地祭　修養団捧誠会

神里の万霊万物尊愛や天地自然の法則を説く出居総裁

修養団捧誠会（本部＝東京・池袋、出居徳久総裁）は10月8日正午から、静岡県沼津市の悠久世界平和郷（神里）の万霊万物尊愛堂で「第45回神里聖地祭」を挙行した。神里聖地祭の挙行は5年ぶり。

当日は雨天のため「平和行進」は行わず、万霊万物尊愛堂に参列者が整列した中、出居徳久総裁が入場、着席した。「礼法」を執り行い、開式。出居総裁が厳かに「いのりのことば」を奏上し、青木正孝会長の式辞、来賓紹介、祝電披露が続いた。

出居総裁が登壇し、「あいさつ」。はじめに「晴れてよし、曇りてもよし、雨もよし、自然のままに歩みましませ」と述べた。

当日は雨天により霊峰・富士山は目には見えないものの存在しており、「天地自然の法則によって生ずる太極もまた、目には見えねども、厳然と存在しております」として、太極の存在を実感していることを披歴した。

出居総裁は、神里の趣旨は万霊万物尊愛であり、天地自然の法則によって活かされ、生きていることへの感謝といのちを尊び、協力融和で一つひとつできることから平和の礎を築いていくことであると説いた。

そして「このような時こそ人種国籍信教を越えて、私たち一人ひとりが協力融和の精神で、日々できることから一つずつ学び修め、実行させていただきたいと思います」と述べ、「5年ぶりに皆様と共に聖地祭を挙行させていただき、心新たに、また新たな一歩を踏み出してまいりましょう」と呼び掛けた。

この後、参列者が起立し「平和郷誠歌」を拝唱、森祐二副会長の発声で乾杯し、祭典を閉式した。

4年ぶり 願いを込めて 一乗行進

お会式・一乗まつり　立正佼成会

立正佼成会（庭野日鑛会長）は10月15日、東京都杉並区の本部及び周辺で「お会式・一乗まつり」を、コロナ禍を経て4年ぶりに開催した。

お会式・一乗まつりは、庭野日敬開祖が慕う日蓮聖人の遺徳を偲び、「法華経」に込められた一乗精神をもって「人を救い、世を立て直す」との生涯を貫いた庭野開祖に、会員が追慕・讃歎し、報恩感謝の心で菩薩行実践を誓願するもの。今回のテーマは「『彩開』この時を待ち焦がれていた!!」。参加者一人ひとりが仏性の輝きによって自他を彩り、こころひらき、分かち合い、あじわう場とする―が趣旨。

午前からの雨が止み始めた午後1時半過ぎ、普門館跡地の普門エリアで発進式が行われ、府中教会青年男子部長の吉沼啓二朗氏が発進宣言。この日に向けて一生懸命に練習に励む青年たちの姿に「いつも勇気をもらい、この場に立つことができました」と感慨を述べ、立正佼成会サンガの明るく、優しく、あたたかい姿が皆の心を照らし、笑顔が増えるように「願いを込めて、精いっぱい一乗行進をさせていただきます」と高らかに宣言した。

この後、東京教区の教会で構成される21隊、約4千人の会員が和田2丁目交差点から本部の大聖堂正面玄関前、法輪閣駐車場まで、元気よく練り歩いた。

各隊列とも威勢のよい掛け声と鳴り物に合わせ万灯や、青年らによる纏（まとい）が披露され、沿道からは熱い声援が送られた。

庭野日鑛会長と庭野光祥次代会長、教団役員らが揃った大聖堂の観覧席前では各隊列ともひときわ力の入った行進を展開した。

観覧席前―力のこもった行進が続いた

秋の大祭 各地で執り行う

辛抱はいずれ実りを生む
午前には「まと霊符納札祭」
円応教

円応教（深田充啓教主）は10月7日（遠方教会）と8日（近県教会）のいずれも午後1時から、兵庫県丹波市の円応教本部の本殿礼拝所で「秋季大祭」を挙行し、式典の様子は信者に映像配信された。

深田教主は御親教で人の役に立たせていただく働きを説いた

7日の祭典開式前には、親愛教会太鼓部が百年太鼓「来光」を披露。秋季大祭の開催を祝い、真殿におまつりされている大御親様、深田千代子教祖に向け太鼓の響きが奉納された。

両日とも祭典は深田充啓教主の入場から始まり、献上祭員による「献上の儀」に続いて、献花・献饌・献茶が真殿に捧げられ、深田教主を祭主に一同で「おつとめ」を執り行った。

祝電披露の後、7日は小坂匡弥理事長が、8日は山川喜久子副理事長があいさつに立ち、大祭に多くの信者が参拝された事に対する謝辞を述べた。

深田教主が教典の390項について「御親教」を行い、人間の働きには、人の役に立たさせていただくという使命、目的があり、その目的に向かって動いていくと説き、「多くの人々のお役に立たせていただく働き、み教えにある『世の中の道具』になるんです」と述べた。

また、辛抱は自分の目的や好きなことのために耐え忍ぶこと、我慢は嫌なことをただ耐え忍ぶことで、「我慢の中には不満が生まれ、辛抱の中には希望が生まれます。辛抱はいずれ実りのある時がきっとまいります」と述べた。

その上で、深田教主は「私たちは今、甘えすぎていないか、自問自答していただきたいと思います。もっと御教祖様や先達の先生方の心を汲んで、一生懸命に私たちも頑張らせていただき、行っていかなければならないと改めて心に念じております」と説いた。

この後、「佳き日の歌」を斉唱、教団基本方針を奉唱し、閉式した。

また、7日と8日の午前10時半からは霊園お火たき所で「まと霊符納札祭」が執り行われた。

深田教主が入席し、信者各家をご守護いただいたことに感謝する祭文を奏上。深田教主による火入れの後、自覚反省懺悔文、般若心経が唱えられる中、深田千代子教祖の「み霊代」である「まと霊符」が参列者の手によってお火たき炉に納札された。

深田教主は御親教で、信者の各家庭を1年間お守りした「まと霊符」を一同で納札できたことに感謝し、「大御親様、御教祖様、そしてご先祖様はいつも私たちを見守りくださり、大難を小難に、小難を無難へとお導きくださっていると思います」と述べ、「『神仏あるないの判じる意味／行いにて知ること／判じることなり』。神仏のお守りに感謝申し上げ、生かされている喜びを多くの方々にお伝えしていきましょう」と呼び掛けた。

感謝報恩の人生の指標を説く
全国の会員が御霊地に参集
解脱会

解脱会（本部＝東京・四谷、岡野英祥法主）は10月8～10日、埼玉県北本市の御霊地で「第183回秋季大祭」を挙行した。新型コロナウイルス感染症対策をとりながらも、コロナ禍前の式典内容で行われ、全国から会員が参集し開催された。

8、9日の大祭式典は両日とも午前11時に開式。祭典委員長により開式の辞が告げられた後、国歌、「大祭の歌」斉唱、拝礼行事に続き、解脱金剛尊者（岡野聖憲会祖）の「み声」（録音）を拝聴した。岡野孝行青年本部長はじめ青年部役員の手により、「おみたま櫃」が萬霊魂祭塔の前に恭しく奉迎安置された後、「献供の儀」を行い、「萬霊大供養」を執り行った。

9日の岡野英夫理事長の式辞では、「私たちは御霊地で開催する大祭において、大自然に抱かれ、大自然の法則とともに真の人間道を学ぶことができます」と述べ、時代の大きな転換期が到来し、すでに新たな時代に向かって歩んでいるとして、「人生とは波乱万丈です。大成したとしても、人生の最期には地位も名誉も、財産もたいした意味はありません。人生で本当に意味あり、価値あることは、生涯で世のため、人のためにどれくらい尽くしたのか、どのような念願をもっていかに懸命に生きてきたのかということにあります」と述べた。

そして「その人生の輝きは必ず多くの人の心に残り、後世に語り継がれていくでしょう。それこそが人生の意味であり、価値であり、感謝報恩で生きる明確な人生の指標であるはずです」と説き、自己の魂の方向性をよく確認すること、平和で調和した世界を目指し、日本精神の修養、国家の立て直しができるよう念願していることを訴え、さらなる深い理解と協力を呼び掛けた。

今回は式典第2部として鏡開き、直会なども行われ、9日は来賓として参列した石倉寿一・新宗連理事長が鏡開きで登壇、直会では乾杯の発声を行った。

鏡開きで登壇する岡野理事長（中央）と石倉新宗連理事長（右から2人目）

紛争終結へ平和祈る人を増やす
御神尊感謝大祭
善隣教

善隣教（力久道臣教主）は10月19、20、23日に、福岡県筑紫野市の本庁で立教76周年記念の「御神尊感謝大祭」を執り行った。

19日午後4時からは全国御行場の中心地・原田全国御行場で「前日祭」が行われた。力久辰斎教祖（御神尊）が帰幽（1997年）後、22日間の「幽顕行」を経て「神如幽顕自在之神」として蘇ったことに由来する「幽顕行完結妙合之御儀」を営んだ後、大祭御神火を採火、灯籠行列を組み、本庁御霊殿まで運ばれた。

20日は午前10時から、御神尊感謝大祭祭典を執り行った。聖堂内に御神火と御神端を献上、大祭御神火を採火し点火。力久道臣教主が臨殿し、祭文を奏上。参列者が一心に御聖経を唱える中、御神像の扉が開かれた。力久教主らが聖堂を一巡し信徒を浄霊。力久教主が参列者に向かって御慈光を照射した。

23日は午前10時から善隣プラザで「世界平和祈願・生命浄化火焔熱祷の祈り」を執り行った。開会宣言の後、教会御旗が入場。力久教主らが臨殿して「御祈り」、お焚き上げ場の「御祓い」を執り行った。力久教主が大祭御神火をお焚き上げ場に点火し、「世界平和祈願」「生命浄化大願い木札」のお焚き上げを行った。

この後、祝賀式では「ひょっとこ祭り」が催された。力久教主は「お言葉」で、世界で紛争が収まらず多くの市民が犠牲になっていることにふれ、「紛争が1日も早く収まるためには、平和を祈る人が増えなければなりません。宗教受難の今、宗教者、信仰者が本気になって祈り、笑顔をもって人を喜ばせていくことが大切。いのち輝く人生を切り開いていくためにこそ、堂々と〈善隣の道〉を伝えてまいりましょう」と述べた。

力久教主らが聖堂を一巡して信徒を浄霊した

大祭と祈りの意義を説く
香川県小豆島 御本宮大祭
玉光神社

玉光神社（本部＝東京都三鷹市、本山一博宮司）は10月23日午前10時から、香川県・小豆島の本宮で「御本宮大祭」を斎行した。

1932（昭和7）年2月、小豆島・双子の浦で病苦により投身自殺を図った教祖・本山キヌエ師に玉光大神が降臨したことから、準教祖・余島シズエ師と共に宗教活動を開始。大祭は玉光大神が世界中の神々を集め、世界平和について協議する場といわれ、基本的に信者のみが参列し、玉光大神に奉仕を行う。

大祭に先立ち、22日午後1時から「前日祭」を斎行。本山一博宮司はじめ信者らが本宮の山上にある本殿へ参進し、本殿を開扉し、祝詞を奏上し下山。この後、拝殿で玉光大神が鎮座する神輿に向かい、本山宮司が「御鎮座祝詞」を奏上し、本山宮司と参拝者代表が玉串を奉奠した。

23日午前10時からの本祭は、拝殿で本山宮司を斎主に執り行われた。「修祓の儀」「宮司一拝」「献饌の儀」の後、本山宮司が祝詞を奏上。斎主の先導で参列者全員が「十五条の御神訓」「玉光教十訓」「玉の光」を奉唱した。

この後、本山宮司はじめ参拝者全員が玉串を奉奠し、「撤饌の儀」「昇神の儀」を行い、式典を終了し、「大御子神様」（初代宮司・本山博師）に礼拝した。

拝殿隣に祀られている「妙光之神様」（教祖）と「清光之神様」（準教祖）に参拝した後、本山宮司が講話を行った。

本山宮司は、パレスチナ自治区ガザ地区での紛争に触れ、遠方の戦争に対して私たちができることは少ないが、玉光神社の信者には教祖以来の役割があり、それは「祈ること」であると指摘。玉光神社の祭りは玉光大神と神々との協議の場であることをあらためて説明し、「大神様が神々様と関わられるときに、（玉光大神は）生身の人間である教祖と準教祖にお祈りをさせなさった」と述べ、神々がこの世での出来事に関わる場合には「生身の人間の祈りを必要とされる」と説いた。

そして「この世界の救済は私たち自身の救済であるはずです。私たちは玉光大神様による世界の救済があることを信じ、私たちを救ってくださろうとする大神様の御神意の実現のために精一杯祈りましょう」と参拝者に呼び掛けた。

講話で「祈り」の意義を参拝者に説く本山宮司

逆境に喜び見い出し
神ながら教

神ながら教（水野富久子教主）は10月22日、愛知県名古屋市の本部・大広間で「秋季大祭」を斎行した。

斎主の水野富久子教主と祭員らが着座し、正午に式典が開幕。修祓と降神の儀、献饌が行われ、水野斎主が祝詞を奏上。玉串奉奠を斎主と各教会長、信徒連合会会長、顧問、来賓、各教会総代役員代表らが行った。

参列者一同で「大祓詞」を奏上し、「讃仰歌」奉唱の後、斎主が「御神諭」を奉読した。

この後、「みさとし」を述べた水野教主は、新型コロナウイルスやインフルエンザ、帯状疱疹の流行といった感染症に関する問題について触れ、心を大神に向け、逆境にも動じずに立ち向かうことの大切さを強調。その上で「何ごとも案ずるより、願う心になる。先を暗くするな、先を明るくして、何事も乗り越えさせていただく、これが信仰者の務めである」という水野房教祖の言葉を引用し、未来に希望を抱くことの重要性を説いた。

また、石川県金沢市の信徒から寄せられた手紙に触れ、「艱難のうちに幸福を悟り、逆境のうちに恩寵を感じて、一人喜ぶ」という御神諭からの引用を紹介。逆境を乗り越え、その中で得られる幸せを味わい、感謝の気持ちを忘れずに生きる大切さを示し、今後の精進を誓った。

斎主の水野教主（右奥）が「御神諭」を奉読した

心の平穏は祈りの結果
大和之宮

大和之宮（安食克己代表役員代務者）は10月5日深夜から翌日午前にかけて、山形市の本部で「第38回例大祭」を執り行った。

5日午後11時過ぎから、拝殿で斎主の安食克彦祭司長が修祓を行い、神職のみで「御扉開扉之儀」を斎行。斎主による祝詞奏上、御真言「天照らす光に向かう真の道」を36回奏上し玉串奉奠を斎主が行い、「一拝之儀」で祭儀を終了した。

この後、午前1時過ぎから斎主が「特別祈願」を執り行い、信徒からの特別祈願を読み上げ、「御真言」を360回奏上し、心を込めて祈祷札に入魂を行った。

6日は午前6時から斎主による「朝参り」、9時半からは「一般参拝」が執り行われた。斎主の安食祭司長が修祓、祝詞を奏上した後、参列者一人ひとりが神前で願意を心の中で読み上げ、玉串奉奠。玉串に結び付けた願意の札を外し三方に置き、斎主の前に進み正座、低頭し、神剣加持を受けた。この後、祈祷札と御神酒が授けられた。

安食祭司長は参拝に訪れた信徒に向かい、「すべてが不安定に見える今の時代において、心の平穏が真に求められている。心の平穏を先に求めるのではなく、祈った結果として賜るものである。祈りとは誓いと願いの合わせごとであると安食天惠宮主も説いていたように、願うのみならず、私たちの行動を見通していくことも大切」と述べた。

一般参拝は午前10時半、11時半にも行われた。また、山形名物の芋煮の振る舞いも4年ぶりに再会された。

一般参拝で安食祭司長が神剣加持を行う

信徒の健康を祈念
日本神宮本庁

日本神宮本庁（中島秀典管長）は9月14、15日、北海道帯広市の本宮・帯廣明神大社で「令和5年例大祭」を斎行した。感染対策をとり、14日午後6時から宵宮祭、15日午前11時から本祭を斎主の中島秀典管長（宮司）と祭員により斎行した。

本祭では修祓、開扉の儀が厳かに行われ、斎主が「大祭祝詞」を奏上。コロナ禍の終息と社会の安寧、信徒らの健康と多幸を祈念した。続いて「日本神宮御神文」を奉読した。この後、斎主に続き、役員、崇敬者らによる玉串奉奠が続いた。正午から直会が行われた。

本祭には4年ぶりに多くの崇敬者が参列し、賑やかに催された。

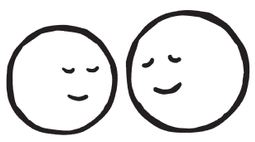
惑わされず日々精進
神恩教

神恩教（夏目由美子教主）は10月22日午前11時から、東京都墨田区の本部で「令和5年秋季大祭」を斎行した。

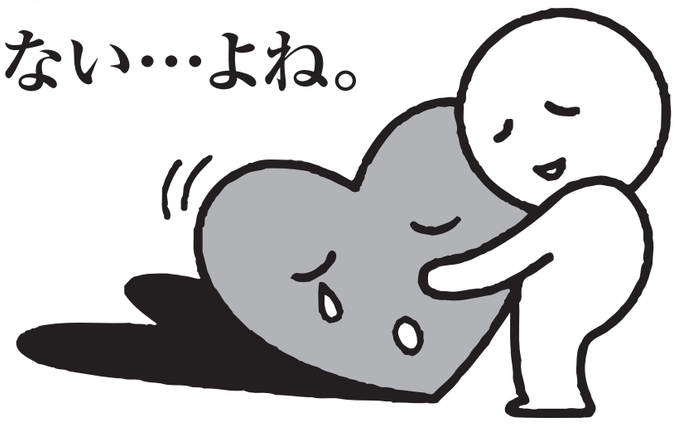
開式の太鼓、開式の辞の後、夏目由美子教主があいさつ（写真）。日々、神事に努めていることを述べ、秋季大祭に際して参拝者に「あたたかい、思いやりのある方たちが集い、和やかに和気あいあいと神恩教は道を進んでおります」と謝意を表した。そして「世の中は大変おかしな時代となっておりますが、私たちはそれに惑うことなく、日々粛々と精進してまいりたいと思います」と述べた。

この後、参列者一同での「祝詞」唱和、夏目教主による修祓と「秋季大祭祝詞」奏上、御神酒の下賜、玉串奉奠が厳かに執り行われた。祭儀後は直会が催され、和やかな歓談が続いた。

ひとりで悩まず電話して！
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。


●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です（通話料はかかります）。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。



NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から深夜2時30分まで
月曜は夜10時30分から深夜2時30分まで
火曜は夕方5時から深夜2時30分まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040（FAX 03-3207-5098）

●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター
06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター
0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ 岩手自殺防止センター
019-621-9090　毎週土曜、午後8時から午前0時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター
052-870-9090　毎週金曜、午後8時から午後11時まで

現代の宗教状況と研究の在り方 議論

日本宗教学会 第82回学術大会

日本宗教学会（鶴岡賀雄会長）は9月8～10日まで、東京都府中市の東京外国語大学で「第82回学術大会」を開催した。3年ぶりに全面的な対面での開催となった。

8日は午後2時半から、公開シンポジウム「教育とイスラーム―公教育から見た宗教文化の多様性」を開催。イランとドイツ、日本の公教育におけるイスラームの取り上げ方、語られ方について報告があり、それぞれ中東と東南アジア、南アジアのイスラームを専門とする討論者、司会らとフロアを交え、議論が行われた。

9日と10日は11の部会に分かれ、それぞれ午前中は個人発表、午後はパネル発表があった。

9日午後のパネルではコンスピリチュアリティ研究について議論

9日午後のパネルでは「コンスピリチュアリティ研究の課題と展望」の発表があった。「conspirituality」とは、秘密の集団が世界を裏で操っていると考える陰謀論（conspiracy）とヨガ、瞑想、各種健康法などの実践と思想運動であるスピリチュアリティを組み合わせた学術概念で、2011年に発表され、近年、注目されるようになった。このような新しい言葉で表現される宗教的現象が興味深いのは、従来、陰謀論の担い手の特徴が、保守的な男性で公的な関心をもち悲観的傾向があると考えられ、他方のスピリチュアリティはリベラルな女性が中心で、私的関心と楽観的な特徴があるなどと、対極的なものと捉えられてきたからである。

このような従来の捉え方自体の妥当性が議論され、昨今、ニュースで取り上げられるQアノンや神真都Qなどの現象がどこが新しいのか異論もあるが、注目されているという。

当日はコンスピリチュアリティ概念と議論の紹介から、同概念の応用として、日本の社会活動家、新型コロナ禍におけるスピリチュアリティとワクチン陰謀論などとの関連の傾向、アメリカのヨガ実践者などに見られる陰謀論的傾向などが報告された。

上越教育大の塚田准教授が「宗教2世」問題について発表（10日）

10日午前、上越教育大学の塚田穂高准教授は「『宗教2世』問題の構造・論点と宗教研究の課題」のテーマで発表。塚田氏はまず「宗教2世」の定義として「特定の信仰・信念をもつ親・家族とその宗教的集団への帰属の下で、その教えの影響を受けて育った子ども世代」と提起。特定の新宗教や、狭い意味での宗教団体に限定しないことがポイントであると指摘した。

「宗教2世」問題が社会問題化した背景としては3点を指摘。新宗教がそれなりの歴史を経て、教勢も停滞する中、教団内の信仰継承を重視し、実際にその割合が高くなっていること、SNSの普及で、当事者が匿名で発信しやすくなったこと、家族の内部であっても虐待などの深刻な事案において、当事者を保護する流れになってきたことを挙げた。

一方で、宗教研究においては、どうして人は宗教に魅かれ、入信するのか―という「宗教1世」の入信（回心）に焦点が当たってきたこと、教団を通した調査に偏り、脱会などの問題性が見過ごされたことなど、従来の調査・研究方法の限界を指摘した。

また、10日午前には、大正大学地域構想研究所の島薗進客員教授が、「近代仏教の社会倫理」のテーマで個人発表を行った。

会員総会を開催―学会賞発表、藤原新会長を選任

9日夕に開催された会員総会では、宗教学研究の奨励のため、毎年、前年度に発表された、発表時満40歳以下の研究者による顕著な業績に対して授与される日本宗教学会賞の発表があり、米・プリンストン大学の亀山光明氏の『釈雲照と戒律の近代』（法藏館、2022年）に贈られた。公表された選考委員会報告によると、同書は幕末から近代にかけて戒律復興運動の提唱者として活躍した、真言宗の僧侶・釈雲照（1827～1909）の思想と行動について論じ、浄土真宗を中心とした近代仏教史像に新たな視点を加え、上座部仏教や朝鮮仏教との対比、近世仏教研究と近代以降の日本仏教の複雑なつながりを描いたなどと評価された。

また、鶴岡賀雄会長の任期満了に伴い、新たに東京大学大学院の藤原聖子教授を新会長に選任した。

迅速な解散命令と財産保全求める

全国霊感商法対策弁護士連絡会

全国霊感商法対策弁護士連絡会（全国弁連）は9月30日夕、声明「旧統一教会の解散命令請求を目前に控えて」を発表した。

声明は、同日午前1時から都内で開かれた全国弁連の集会を経て発表されたもの。文化庁が10月にも世界平和統一家庭連合（旧統一協会）への解散命令を請求する方向で検討していることを受け、解散命令請求の迅速な処理や財産保全の特別措置法の成立などを求めている。

全国弁連は集会後の午後6時過ぎに記者会見を開き、声明を発表した。声明では、全国弁連が1987（昭和62）年の結成以来、旧統一協会による被害救済や組織的で悪質な手口を再三訴え、政府に抜本的な対策を訴え、文化庁に対して解散命令請求を行うよう繰り返し申し入れてきたことをあらためて強調。今回、文化庁が解散命令請求を行おうとしていることに「遅きに失した感は否めないものの、当連絡会はこれを高く評価する」と述べている。

一方、裁判所により解散命令が出され、旧統一協会が宗教法人格を失ったとしても「問題がすべて解決するわけではない」として、過去30年以上、放置されてきた多くの被害者のほとんどが救済されておらず、2世問題や被害者家族の問題が残されていることを指摘。宗教法人格を失っても宗教団体として活動可能であることから、「その後も旧統一教会による被害が生じることがないよう注視しなければならない」と注意喚起している。

そして次の3点を強く求めている。①旧統一教会に対しては、過去の被害・被害者への誠実な対応と、謝罪の上での損害に対する一切の賠償、②解散命令請求事件の審理を迅速に進め、速やかに解散命令が出されること、③政府及び各政党に対して、臨時国会中に教団の財産の隠匿・散逸が懸念される場合、裁判所が教団の財産を管理し保全することを可能とする特別措置法を速やかに成立させる。

声明では、昨年7月の安倍晋三元首相の銃撃事件以後、旧統一協会がアピールしている「教会改革」の欺瞞性や、「コンプライアンス宣言」（2009年3月）以後も多くの相談・裁判が存在していることなどについて、具体的な事例・数字を示している。

記者会見では全国弁連の弁護士らから声明の趣旨について、詳細な説明がなされた。（注：弊紙では「旧統一協会」と表記しているが、本稿では全国弁連の声明表記「旧統一教会」は原文通りに記載した）

集会後の記者会見で声明を発表する全国弁連の弁護士ら

全戦没者の慰霊奉賛 次世代へ

千鳥ヶ淵戦没者墓苑 秋季慰霊祭

千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会（鈴木俊一会長）は10月18日午後1時過ぎから、東京・九段の国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で「令和五年度秋季慰霊祭」を開催。宗教界の来賓として、日本宗教連盟（日宗連）の田中恆清理事長の代理として平尾朝典事務局長、新日本宗教団体連合会（新宗連）の石倉寿一理事長と新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）の宮本泰克委員長、加盟教団の代表らが参列した。

千鳥ケ淵戦没者墓苑は1959（昭和34）年、国により建設され、軍人・軍属・一般邦人を含む戦没者の遺骨を奉安している。先の大戦に際し、海外において約240万の日本人が亡くなった。戦後、戦友らにより遺骨が持ち帰られ、1952（昭和27）年のサンフランシスコ講和条約（主権回復）以降、政府による海外の遺骨収集事業が開始。同墓苑は日本に持ち帰られた、名前の分からない遺骨などが納められている「無名戦没者の墓」である。現在でも毎年、遺骨の帰還・納骨が続けられており、現在37万485体の遺骨が奉安されている。

宗教界の来賓として新宗連の石倉理事長らが献花を行った

当日午後1時過ぎ、秋篠宮皇嗣同妃両殿下が臨席のもと、開式。国歌独唱、献茶の儀と続き、鈴木俊一会長が式辞を述べた。鈴木会長は、ロシアのウクライナ侵攻など国際情勢の変化に触れつつ、今日の日本の平和と繁栄が「戦没者の方々犠牲の上に築かれたものであり、英霊のご加護によるもの」として「心からの感謝と哀悼の誠を捧げます」と述べた。そして「当墓苑を全戦没者の慰霊奉賛の灯火を守る国民的聖苑として、確実に次の世代へと継承すべく努力を続けて参ります」と誓った。

続いて、墓苑内に歌碑がある昭和天皇と上皇陛下の御製（歌）が奉誦され、戦前から続く少年少女合唱団「音羽ゆりかご会」により童謡唱歌「海ゆかば」「里の秋」などが奉唱された。

内閣総理大臣の追悼の辞（代読）の後、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の拝礼に合わせ、参列者一同が拝礼し、黙祷を捧げた。陸・海・空自衛隊の拝礼の後、遺族・戦友会、政界、宗教界の来賓による献花があり、日宗連の平尾事務局長、新宗連の石倉理事長らが献花を行った。

「信仰の杜」をテーマに開催

第20回奈良県宗教者フォーラム

第20回奈良県宗教者フォーラム（同実行委員会主催）が9月12日午後2時から、柏原市の橿原神宮・神宮会館で開催された。当日は県内の宗教者と一般参加者が参加した。

基調講演を行う元神宮司廳営林部神宮技師の村瀬氏

当日は「日本のこころと宗教の役割―信仰の杜（もり）を伝える」をテーマに開催された。午後1時からは開会に先立ち、橿原神宮内の内拝殿で「世界平和祈願祭」を執り行い、参加者一同で祈りを捧げた。

フォーラム冒頭、樋口俊夫実行委員長（廣瀬神社宮司）と久保田昌孝・橿原神宮宮司があいさつに立ち、その後、山下真・奈良県知事が来賓あいさつを述べた。

続いて、元神宮司廳（伊勢）営林部神宮技師の村瀬昌之氏が「神宮宮域林―モリの恒続性」と題して基調講演。村瀬氏は伊勢神宮宮域林の経営計画の歴史を説明し、計画理念である「風致増進」「水源確保」「御杣山（みそまやま）復元」について解説した。

また、御杣山でヒノキを育てるにあたっての植栽については「必ずしも共存共栄でなく、自然環境と折り合いをつけることも必要である」と述べ、現在は広葉樹を植えず、ヒノキを切る杜作りを進めていると説明した。

この後、パネルディスカッションが行われ、パネリストとして、春日大社の西村泰宏禰宜と金峯山寺の五條永教執行長、立正佼成会の中村浩士奈良教会長が登壇。コーディネーターを橿原神宮の長倉健一権禰宜が務めた。3氏は、それぞれの信仰地での自然への関わりを通して培った信仰の尊さや、宗教の果たせる役割などを語り合い、学びを深めた。

パネリストらはそれぞれの信仰地での自然への関わりを語り合った

最後に、辻村泰範副実行委員長（西大寺執事長）があいさつを述べ、フォーラムは閉会した。

新刊紹介

創造論者VS.無神論者 ―宗教と科学の百年戦争

岡本 亮輔 著

「創造論者」とはキリスト教において、全能の神が実際に存在し、聖書に書かれていることが文字通り絶対に正しいと考える人々のこと。19世紀にダーウィンの進化論が出て以降、人間は猿のような生物から進化したと一般には考えられているが、創造論者は聖書に書かれている通り人間は神が創造したもので、すべての出来事は神があらかじめ定め、コントロールしていると考える。

本書は百年前のアメリカの高校で、進化論を教えた教師が州法違反で逮捕されたことを巡る有名な裁判（猿裁判）も取り上げるが、焦点があてられるのは2000年代以降の創造論者と無神論者の対立の激化である。具体的にはパロディ宗教と新無神論が取り上げられる。前者は「マラドーナ教会」「ジェダイ教」「空飛ぶスパゲッティ・モンスター教」など、伝統的な宗教を茶化すことによって、私たちに「宗教とは何か」を根本的に問いかける。

新無神論は従来の無神論を突き詰め、創造論のような極端な考え方（原理主義）だけでなく、主流の穏健なキリスト教、さらにはその他一般の宗教まで否定・攻撃の対象となる。新無神論者は宗教の擁護者からは「無神論原理主義」とさえ呼ばれ、批判される。

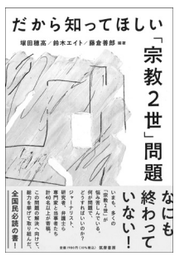
本書には130人以上の人物が登場し、個性的な群像劇として楽しい。著者の文章、構成力も相まって、多くの読者は良い意味で面白おかしく読めるだろうが、まじめな信仰者の中には、宗教離れや反宗教の世界的な進行に末恐ろしさを感じたり、大切なものを冒涜されたと感じて怒りすら覚えるかもしれない。

しかし、一貫して「宗教とは何か」「宗教は本当に必要なのか」が問われているのであり、信仰している人も、そうでない人も、一人ひとり考えさせられるだろう。（講談社、四六判、272頁、1980円）

だから知ってほしい「宗教2世」問題

塚田 穂高・鈴木エイト・藤倉 善郎 編著

「宗教2世」問題は2021（令和3）年2月と5月にNHKが取り上げ、各種書籍が出版されるなど、にわかに一般の注目を集めるようになっていた。そこに22年7月の安倍晋三元首相銃撃事件があり、容疑者の背景として、母親が旧統一協会（世界平和統一家庭連合）の信者で多額の献金をし、家庭崩壊状態だったことが報じられ、一気に沸騰した。編著者らも配慮しているように、幸せに信仰している「宗教2世」も多いわけだが、いわゆる「カルト」の問題を含め、その問題性には注目せざるを得ない。



本書は2部構成となっており、第1部『宗教2世』問題、その核心と解決への道―分析・対策編」では、多くの研究者や大手メディアのジャーナリズムが取り上げなかった時代から、先駆的に研究、取材を続けてきた研究者やジャーナリスト（編著者らがその代表）、「カルト」問題の延長で長年、この問題に取り組んできた弁護士や支援者らが執筆。

第Ⅱ部「私たちの声を聞いてほしい―当事者・実践編」では、「宗教2世」問題でよく名前の挙がる教団の（元）2世信者から、自助グループの運営者、あまり注目されない、いわゆる「伝統宗教」と呼ばれる仏教、キリスト教、そしてイスラム教などについても取り上げる。

全体で25章、40人を超える執筆陣の多くは、それぞれ一人でも一冊書けるほどの論客揃い。その執筆者が、抑制的にそれぞれ自分の専門領域で的確にまとめているため、読みやすいが、見た目以上に濃い内容となっている。

「『宗教2世』問題は人権問題であり、社会問題である。また子を育てること、人に教えること、文化や価値を伝えること、他者を尊重すること、などがあらためて問われる問題でもある。他人事ではない」（編者代表・塚田氏あとがき）。苦しんでいる当事者だけでなく、幸せに信仰している人も、宗教団体に所属していない人にも読んでいただきたい。（筑摩書房、四六判、416頁、1980円）

死生観を問う ―万葉集から金子みすゞへ

島薗 進 著

宗教学、死生学の第一人者で、グリーフケア研究の分野において長年研究を重ねてきた著者が宗教や詩歌、物語を通じて現代と古代を行き来しながら、日本人の死生観を歴史的に考察した書。日本人の死生観が日本の文化や日常生活にどのように影響を与えてきたかについて探求し、日本社会の死生観の複雑さを明らかにする。

金子みすゞは20代でこの世を去ったが、著者によると、その詩や歌詞には喪失、祈り、生と死の瞬間についての感受性が表れているという。彼女の詩は深い哲学的洞察を含み、孤独に苦しむ多くの現代人に生きる希望や困難を乗り越える力を伝えたと紹介する。

一方、夏目漱石は40代で死の彼方を意識し始めた。漱石の詩や漢詩は、中年期になると死と生についての新たな洞察を示し、安らぎを見つける試みが表れる。年齢を重ねることで、死生観やその捉え方が変化し、深化することがあると言及する。

本書は、死に対する日本人の独特なアプローチや、異なる時代と背景で生み出された死生観を紹介しながら、死と生についての新しい理解を示す。超高齢社会を生きる私たちの心に響く死生観の表現を問う待望の一作だ。（朝日新聞出版、四六判、352頁、1870円）

食料問題テーマに学習会

宗教・研究者エコイニシアティブ

12月11日

環境危機の克服や人と自然が調和する文明原理に向けた新しいライフスタイルづくりへの啓発活動を進めている宗教・研究者エコイニシアティブ（RSE、武田道生代表）は12月11日午後2時から4時まで、横浜市の孝道山本仏殿で食料問題の専門家、板垣啓四郎氏（東京農業大学名誉教授）を招いて、環境学習会「世界の食料安全保障とわが国の食と農のありかた」を開催する。

気候変動の今、アフリカのみならず全世界に紛争を端緒とする飢餓が広がっている。「飢餓ゼロ」のSDGs目標は、命を支える宗教者にとって従来以上に重要な関心事となっている。公開学習会はウクライナ危機のさなか、「食料と環境再生」の問題に深く関わる持続性や国際環境について、農業経済学へと視野を広げ、「食」を支える新たな環境課題を学び、「いのち」への理解を深めようとするもの。

公開学習会の応募期間は11月11日から12月8日まで。会場・Zoomとも先着100人。応募方法は「rse.com2@gmail.com」宛てメールにて、会場またはZoomの参加希望・氏名・所属を明記。Zoom参加希望者には後日、ZoomのIDとパスコードが送られる。参加費は無料。詳細はフェイスブックのRSEページ等を参照。